

現代 左官事情

<その103>

「建築と左官」

23. 明治以後の 民衆建築の変遷(3)

ものづくり大学
特別客員教授
鈴木 光

新年あけましておめでとうございます。
前回に引き続き、大正～戦後期における我が
国の建築の変遷を辿っていきます。(編集部)

4. 本稿の時代区分

第4期：大正元年～11年(1912年～1922年)

村松氏は、第4期を「第2世代の活躍期であり、前期の末に紹介された鉄骨や鉄筋コンクリート構造が建築技術を支配するようになった。そのきわめて強い工学的な性格と第3期を通じて成立してきた建築の芸術性とが激しい相剋を繰り返した時代とも言えよう」としている。

一方、左官でのこの期は、博覧会での左官工事で簾下地の外壁漆喰仕上げがあった。これらは、その後バラック建築、看板建築に応用されるようになる。また、内壁の漆喰仕上げは漆喰装飾で絵模様塗、線形塗が多くのが

第4期：大正元年～11年(1912年～1922年)に見る建築

旧帝国ホテル

設計：フランク・ロイド・ライト
鉄筋コンクリートおよび煉瓦コンクリート造
地上3階(中央棟5階)
地下1階



写真13 旧帝国ホテルのファサード

大正12年(1923)内幸町に建設され、現在は愛知県犬山市明治村に一部が移設されている。アメリカを代表する偉大な建築家フランク・ロイド・ライトの設計による帝国ホテルが完成したのは大正12年で、関東大震災直前であったが、大きな被害はなかった。被害を免れたのは、伝統的日本建築の構造である柔構造で免震構工法によるものとされており、彼が日本を愛し、日本の伝統を重んじたことによる。それは、この建物のディテールにも見ることができる。幾何学模様を彫刻した日本的素材の大谷石と、黄褐色のテラコッタを主要な仕上げ材料としており、構造構成は鉄筋コンクリートで片持ち梁の水平で深い軒の目立つ外観であり、平面構成は華麗で複雑な空間構成の内部など、設計者ライトの偉大さが如実に現れている。

帝国ホテルで使用された材料は、震災後の建築に大きな影響を与える。テラコッタは穴抜け煉瓦と呼ばれていた。ここでのテラコッタは、日本的な松(松傘)をモチーフとしていた。

次の大谷石は、日本で主に門塀工事や暗渠などの建築の付帯部分に用いられるものである。帝国ホテルで

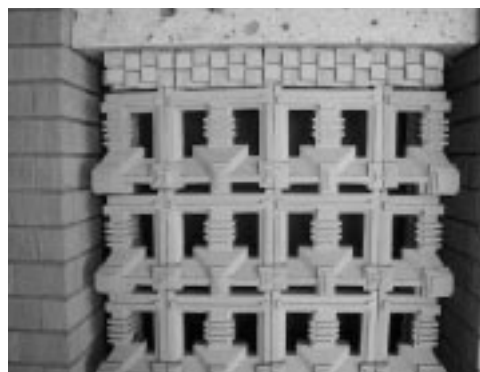


写真14 帝国ホテルの内部詳細

は、主体構造にならなかったが、ライトがあえてここで使用した理由は、デザイン的要素もあるが、大谷石が細工しやすく大量に入手できるという物理的要素も存在していた。

スクラッチタイルは、傷のような縦溝のついたもので別名がスダレ煉瓦と呼ばれた。帝国ホテル建築現場の脇で製作され、そこが工場にもなっていた。スクラッチタイルは、溝を切るのに等間隔の釘を板に打ち付けたものを両手で持って、息を殺して真っ直ぐ引いたものである。この溝は、当時平滑にタイルを焼くのが困難であったことが起因していたと記録され、結果的に、この溝の醸し出す壁面での妖しさは、人間の手によるものであった。その後、このスクラッチタイルは東京大学はじめ多くの公官舎で採用されたアール・デコ調の代表的外壁材料となる。現場脇にあった工場はその後、伊奈製陶に引き継がれることになる。